

# 19世紀フランス壁画研究

## ——教会および美術館での作品調査とフランス国立図書館での文献調査

鈴木俊晴

美学美術史学専攻 前期課程2年

本調査は「フランス19世紀の壁画研究」というテーマのもと平成19年度9月24日から10月4日にかけてフランスで行われた。

### 1 はじめに

フランス美術の19世紀は、実のところ、壁画の世紀でもあった。それらは、いくつかの例外を除けば、そのほとんどが政府の主導で教会や役所などの公共建築物に描かれたものであり、近代国家の形成期にあったフランスの公共の夢とでも言うべきものを伝えてくれる。言いかえれば、壁画はそれが描かれるときの政体の政治的な姿勢に根本的に左右されざるをえない特殊なジャンルであり、そのため、一般的なタブロー画の研究と比べるとほとんど研究が進んでいないのが現状である。このような視点の偏りがみられるのは、申請者が修士論文で対象としているピュヴィ・ド・シャヴァンヌ研究においても同様である。19世紀を代表する壁画画家であるピュヴィは、タブロー画研究を基本とする象徴主義やモダニズムなどの彼より後の時代の判断基準から評価されることが多く、19世紀フランス美術史のなかではまるで突然変異体のようにしか扱われてこなかった。

このような研究状況を踏まえ、筆者は19世紀の壁画作品を同時代の作品との関連と断絶を同時に探ることにより積極的に美術史のなかに取り入れたいと考えている。そのためには、図像の類似や継承、主題の選択といった画家の創意の問題だけでなく、壁画に特有な技法や建物に限定される条件、政治体制や宗教組織の関与などの側面を考慮に入れる必要がある。また、19世紀絵画史を研究するにあたってはもちろん批評の役割を無視するわけにはいかない。したがって、本調査では、具体的な壁画作品の図像を把握するために美術館、教会、官庁などでの写真撮影を含む実地調査と、それらの作品についての未だ不十分な書誌を補完するため、フランス国立図書館(Bibliothèque nationale de France；以下国立図書館と表記する)にて

文献調査をおこなった。以下はその報告である。

### 2 調査日誌

- 9月24日 サン＝ポール・サン＝ルイ聖堂にて作品調査
- 25日 サン＝ニコラ・シャルドンネ聖堂  
オルセー美術館  
サン＝シュルピス聖堂にて作品調査
- 26日 国立図書館にて文献調査
- 27日 国立図書館にて文献調査
- 28日 ルーヴル美術館にて作品調査
- 29日 国立図書館にて文献調査
- 30日 リヨ市立美術館にて作品調査
- 10月1日 オランジュリー美術館にて作品調査
- 2日 国立図書館にて文献調査
- 3日 ドラクロー美術館  
サン＝ロック聖堂  
サン＝フィリップ・デュ・ルール聖堂  
ロマン主義美術館  
ルーヴル美術館にて作品調査
- 4日 パンテオンにて作品調査

### 3-1 作品調査の手段

手段について具体的に記す。まず作品調査について。教会堂内部における19世紀に制作された壁画は未だ写真資料が少ないのが現状であるため、できる限り写真を撮影することとした。教会の建物の中は基本的にはたいへん暗く、また、(本来大変美しい光の効果を生み出してくれる)ステンドグラスの光が作品に入り込んでしまうなど、絵画作品を撮影するのに適する環境とは言えず、また、壁画は側祭室もしくは放射状祭室に描かれることが多いため作品正面からの撮影ができないことなど、教会堂内部の特殊な条件には苦勞した。幸い本調査で対象とした教会ではすべて堂内で三脚を使うことができたので、資料写真が暗すぎ

たり、ぶれてしまったりすることはなかった。

写真撮影とあわせて、それぞれの作品の作者、年紀、主題、技法の同定をする作業を行った。多くの作品には少なくとも作者の署名があった。その中にはラテン数字などで制作年が記されているものもあった。それがない場合は、教会堂内部におかれているパンフレットや教会守からの情報を頼りにすることもあった。また、主題についてはそれぞれの壁画が設置されている祭室の守護聖人などから類推することができ、それほど多くはないものの、いくつかの教会堂では解説パネルが置かれていたり、壁画そのものに主題の典拠が書かれていたりすることもあり、それらを参考にすることができた。技法については、間近で見るとにはやはり解説パネル等を参照するほかなかったが、壁画そのものに近づいてみることはできない場合が多かった。

また美術館でも可能な限り写真撮影を行った。そこでは、美術館建築に付随する壁画はもちろんのこと、それらを制作した画家のタブロー画やデッサンなども対象とした。美術館は、三脚を立てることはできないものの、言うまでもなく教会堂内部よりもはるかに絵画鑑賞に優れた場所であり、絵画を細部まで熟覧し、近くからの写真撮影もおこなうことができた（もちろん大階段室や天井に描かれた壁画の一部ではそれをするにはできないのだが）。こうすることで、彼らのもつ技法がどのように伝統に接近し、またそれと違っているかを検討することができた。

本調査の対象とする作品については、筆者は同年春に、同じく『人文学フィールドワーカー養成プログラム』の支援を受けて、パリ市内の教会堂、ルーアンとアミアンの美術館で壁画作品の調査を行っているため、今回は前回の調査結果をふまえ、そこで調査しきれなかったものと特に重要な作品の二つを重点的に調査することとした。ただし出発前に予定していたマルセイユのロンシャン美術館は長期間に渡って改修工事のため休館中であることがパリ到着後にわかり、訪問および調査はあきらめることとなった。

### 3-2 文献調査の手段

次に文献調査の手段について記す。今回の調査ではピュヴィ・ド・シャヴァンヌの1881年の作品《貧しき漁夫》を対象とする（Fig. 1）。この作品は発表当初には批評家から賛否両論の様々な意見を引き出すものの、結局1887年にピュヴィを代表する一枚として国



Fig. 1

ピュヴィ・ド・シャヴァンヌ《貧しき漁夫》1881年、オルセー美術館、パリ

家買い上げとなっている。今回この作品に特化することとしたのは、1881年はピュヴィの画業において大きな転換点であったからであり、そこで発表された《貧しき漁夫》が引き起こした議論は彼の作品全般にわたる問題を提示しており、批評研究が十分に進んでいない現状においてこの作品の批評の全体像を提示することが急務である、と考えるからである。

多くのカタログ・レゾネと同じく、残念ながらピュヴィ・ド・シャヴァンヌの作品カタログの書誌目録は作品発表当時の新聞批評を取りあげていない。そのため、以下の四点の書籍／論文から、1881年の新聞の中で美術批評を掲載しているようなもののリストをつくることから作業をはじめた。これらの作業はもちろん調査出発前に行っておいた。

- 1) *Histoire générale de la presse française*, publiée sous la direction de Claude Bédarride, 3ème tome : De 1871 à 1940, Paris, Presses universitaires de France, c. 1969-c. 1976.
- 2) Rouart Denis et Daniel Wildenstein, *Edouard Manet : Catalogue raisonné, t.1-2*, Lausanne, Bibliothèque des arts, 1975.
- 3) Michel Marlais, "Puvis de Chavannes and the Parisian daily press," *Apollo*, no. 444, 1999, pp. 3-10.
- 4) 国立西洋美術館編集『1874年——パリ [第一回印象派展] とその時代』, 展覧会カタログ, 読売新聞社, 1994年。

文献1はフランスにおける出版物によるマスコミュニケーションの通史であり、19世紀後半に刊行されていた一般的な新聞をリストアップするのに用いた。文献2は19世紀フランス美術研究においておそらく

最も批評記事の研究が進んでいると思われるエドゥアール・マネのカタログ・レゾネであり、彼の同時代の作品についての書誌目録を参照することで、美術批評を掲載している新聞を拾った。文献3はピュヴィ・ド・シャヴァンヌの画業を通して新聞批評に彼がどのように迎えられたかというテーマの論文であり、文献2と同じく、美術批評を掲載している新聞のリストアップに用いた。文献4には、少々時代が遡るものの、詳細な新聞の目録が付記されており、文献2-3と同じく、美術批評を掲載した新聞を探すのに用いた。

これらの文献から80近くの新聞をリストアップした後、そこから日本国内で手に入るものを除外し<sup>1)</sup>、かつ文献2-4で重複する新聞を優先的に調べていくことで、フランス国立図書館での調査に備えた。

#### 4-1 得られた成果；作品調査

それぞれの作品について詳細に検討するのは修士論文以降の課題とするため、ここでは主な調査対象に簡単に触れておくこととする。

王政復古期のルーヴル美術館はシャルル十世美術館と呼ばれており、その展示室にはフランスが版図を拡大するなかで獲得した各地からの美術工芸品がならべられ、1827年と1835年には天井や壁面にドミニク・アングルやアントワーヌ・グロらによって展示内容に合わせた壁画が描かれた (Fig. 2-3)。部屋によっては当時と多少展示内容が異なるものの、それらの壁画は現在も残されており、調査をすることができた。彼らはダヴィドの流れを汲む画家たちで、寓意や持物を用いて部屋に合わせた内容の作品を描いている。また、1855年の大火災で失われてしまったオルセーの会計院に描かれていたテオドール・シャセリオーの壁画の断片も合わせて調査した (Fig. 4)。この作品はピュヴィが壁画画家を志すきっかけとなったと考えられている作品である。

リヨン市立美術館では大階段室に描かれたピュヴィ・ド・シャヴァンヌの壁画作品《クリスティアン・インスピレーション》、《アンティーク・ヴィジョン》、《聖なる森》、《ローヌ河とソーヌ河》の四作品の実地調査を行った (Fig. 5)。これらは19世紀後半に描かれた地方の美術館装飾のなかでは、同じ作家によって描かれたアミアンのものとともに最も注目すべき作品であり、アミアンの作品と比べるとサイズは小さいものの、大階段室を飾る四面の壁画をほぼ同時期に描いたという点で作品としての完成度が高いと言える。ま



Fig. 2

ドミニク・アングル《ホメロス礼賛》(図版はジャン＝ポール・バルズによる1855年のレプリカ)、1827年、ルーヴル美術館、パリ



Fig. 3

アントワーヌ・グロ《諸芸を振興し、人類を保護するフランスの擬人象》1830-33年、ルーヴル美術館、パリ

たりオンは画家の出生地であり、このプロジェクトを成功させた後に同市芸術院の名誉会長の席を与えられていることから分かるように、画家のキャリアを考えても重要なものであった。また、同美術館では、世紀中葉に描かれたポール・シュナヴァールによるパンテオンの壁画 (未完) の下絵デッサンおよび油彩スケッチを調査することもできた (Fig. 6)。



Fig. 4

テオドール・シャセリオー《平和（会計院のための装飾壁画の断片）》1844-48年，ルーヴル美術館，パリ



Fig. 5

ピュヴィ・ド・シャヴァンヌ《ローヌ河とソーヌ河》および《アンティック・ヴィジョン》1886年，市立美術館，リヨン



Fig. 6

ポール・シュナヴァール《歴史の哲学（エスキス）》1850年，市立美術館，リヨン



Fig. 7

ピュヴィ・ド・シャヴァンヌ《聖ジュヌヴィエーヴの生涯》1877年，パンテオン，パリ

ピュヴィの作品としてはパリのパンテオンの装飾も重要である (Fig. 7)。パンテオンは19世紀後半には当時の美術総監であったフィリップ・ド・シュヌヴィエールによって二回に分けて公共装飾プロジェクトが行われた (1874, 85年)。そこにはフランスの歴史と生活をあらわす大画面の壁画が描かれることになった。ピュヴィは唯一その二回の装飾事業に参加した画家であり、ジャン＝ジャック・エンネルらと同じくパリの守護聖人である聖ジュヌヴィエーヴを主題として制作をおこなっている。パンテオンに描かれた他の画家による壁画との比較も重要であるが、聖ジュヌヴィエーヴは19世紀を通してパリの教会の壁画でくりかえし描かれてきた重要な主題のひとつであり (Fig. 8)，それらの作例とパンテオンに描かれた図像を比較検討することで新たな視点が開けるものと考えている。



Fig. 8

ルイ＝シャルル・タンバル《パリ包囲に際して貧者にパンを配る聖ジュヌヴィエーヴ》1864年，サン＝シュルピス聖堂，パリ

## 4-2 得られた成果；文献調査

国立図書館ではピュヴィ・ド・シャヴァンヌの《貧しき漁夫》についての同時代の批評を探した。上述したように彼の作品についてのビブリオグラフィは未だ不十分なものしかなく、批評記事を探すにはサロンのシーズンである4月末から6月末までの多くの新聞を一日ずつみていくしかなかった。以下は1881年のサロン評を掲載していた新聞のリストである。新聞の名前のうしろの括弧内はピュヴィ・ド・シャヴァンヌ《貧しき漁夫》に何らかの言及のあった記事の筆名、記事名、日付である。

- Le Charivari [Louis Leroy, “Le Salon-Revue,” 4, 13 mai et 3 juin]
- La Civilisation [Elie de Mont, “Salon de 1881,” 2 mai et 9 juin]
- Le Constitutionnel [Henry Trianon, “Le Salon,” 29 mai]
- Le Dix-neuvième siècle [Edmond About, “Salon de 1881,” 12 mai]
- Le Droit
- L’Entr’acte [Daniel Bernard, “Salon de 1881; Vue d’ensemble,” 2 mai et 7 juin]
- L’Estafette [Armand Silvestre, “Le Salon de 1881,” 1er et 5 mai]
- L’Événement [Gonzagne-Privat, “Le Salon,” 1er et 17 mai]
- La France [Mariuce Vachon, “Le Salon de 1881,” 1er et 7 mai]
- Le Français [Edmond Villetard, “Le Salon de 1881,” 25 mai]
- Gazette de France
- Gazette des étrangers [anonyme, “The Salon,” 4 juin]
- Gil Blas [Chassagnol, “Le Salon de 1881, à travers Les Salles,” 2 et 10 mai]
- Le Gaulois [Louis de Fourcaud, “Salon de Gaulois,” 2 mai]
- L’Intransigeant [Hector l’Estraz, “Promenade au Salon,” 3 mai]
- La Justice [G. Dargenty, “Promenade au Salon,” 2 mai]
- Le Lanterne [A. E., “Le Salon de 1881,” 3 et 4 mai]
- La Liberté [1er mai]
- Le Monde [Pierre de Soudeilles, “Le Salon de 1881, 14 mai]
- Le Monde illustré
- Le Moniteur Universel [Édouard Thierry, “Salon de 1881,” 17 mai]
- Le National [Charles Flor, “Le Salon de 1881,” 2 mai]
- La Paix
- Paris-Journal [Bertall, “Le Salon de 1881,” 11 mai]
- La Patrie [M. de Thémines, “Salon de 1881,” 27 mai]
- Le Pays
- La Petite Presse [Pierre Veron, “Le Vernissage,” 3 mai; Georges Vicaire, “Salon de 1881,” 8 juin]
- Le Petit Journal [H. Escoffier, “Le Salon de 1881,” 7 et 10 mai]
- Le Petit Parisien [J. P., “Salon de 1881,” 4 mai]
- Le Rappel [Judithe Gautier, “Le Salon,” 1er mai et 15 juin]
- La République française [Philippe Burty, “Salon de 1881,” 8 mai]
- Le Siècle [Henry Harvard, “Salon de 1881,” 10 et 14 mai]
- Le Soleil [Emile Cardon, “Le Salon de 1881,” 10 mai]
- Le Soir [Messire-Jean, “Le Salon,” 26 mai]
- L’Univers [Claudius Lavergne, “Beaux-arts, le Salon de 1881,” 11 mai]
- L’Univers illustré
- La Vie moderne [Armand Silvestre, “Le Monde des arts,” 14 mai]
- Le Voltaire [Emile Bergerat, “Le Salon de 1881,” 3 mai]

修士論文ではこれらの批評記事の読み込みから《貧しき漁夫》の解釈を進めていくことになるが、そこでは複数の批評に共通して現れるいくつかの言葉ないし表現に着目する。そこには様々な宗教的な説話や同時代の文学などの物語に関する言及もあれば、ピュヴィの表現の拙さや独特の絵画表面の処理方法などに触れているものもある<sup>2)</sup>。それらの文言は従来主題が特定できないことと神秘性を強調する視点、もしくはモダニズムに偏りすぎた造形美学の点からしか語られてこなかった《貧しき漁夫》に新たな視点をもたらし得るものである。つまり、批評家たちが種々雑多な読み込み方をしているということは、この作品が主題をもたないためではなく、様々な物語を「強力に」惹起しながらも、そのどれかひとつに収斂することがない、ということであり、画家がそのようなイメージをつくりだすために絶妙な図像の選択と造形を行っていることの証左であるのだ。ひとつ例を挙げておこう。

ピュヴィ・ド・シャヴァンヌ氏がサロンに出品した作品は活発に議論されている。あるものはそれを激しく攻撃し、またあるものは情熱を持って擁護している。この絵には、いつものように、人を無関心でいられなくする特性がある。この絵には、大衆には気づかれない謎めいた側面があり、それはなにかしら奇妙な、人を驚かせるものである。12世紀もしくは14世紀のフレスコから借用してきたといわれているこの《貧しき漁夫》の素朴な人物像はなにかのシンボルなのだろうか？ それとも現実なのだろうか？ 私が知っているのは、この絵には、抗い難い、胸を刺すような詩情が刻み込まれており、われわれはそれを受け取ることができるが、それはあらゆる分析を、あらゆる論理を寄せ付けない、ということだ。この絵がもたらす感情を望んでいる人がいたら知らせてほしい。私はそれを説明するのはよして、感じ取った印象を忘れずにいるだけに留めておこう<sup>3)</sup>。

批評家エミール・カルドンはここで特定の物語には言及しないが、《貧しき漁夫》を前にして戸惑いながら「素朴な人物像はなにかのシンボルなのだろうか？ それとも現実なのだろうか？」と絵画の参照点を求めようとしているのが分かる。しかしながら彼はそこからどこにもたどり着くことがない。彼は《貧しき漁夫》を言葉で説明することができず、「それはあらゆる分析を、あらゆる論理を寄せ付けない」ものであるとし、「詩情」や「印象」といった、若干曖昧さを残す表現を選択せざるを得ない。ここで重要なのは絵画によって否応なく引き起こされた感情と知性の動きが、少なくとも19世紀の前半までは存在していたそのあて先をここではみつけられずにいるということである。これは、絵画史の視点を広くとれば、19世紀後半におこるレトリックとしての絵画の終焉と符合することでもある<sup>4)</sup>、また、そのなかで壁画画家としてイメージを用いて同時代人にメッセージを送らなくてはならないピュヴィならではの絵画制作の困難さとそれに対する創意であるとも解釈できる。

## 5 おわりに

今回の調査で得られた結果のなかで修士論文に直接結びつくものはどちらかと言えば国立図書館で行った文献調査である。パリを中心とした19世紀の壁画研究は、その対象の大きさもあり、この調査によってよ

うやく足がかりを得たところであると言える。近年例えばクロード・モネの《積みわら》連作などに造形的な価値だけでなく様々な社会的／文化的コンテクストを読み込む作業が注目されているが<sup>5)</sup>、観者に対して具体的なイメージを用いて種々のメッセージを送ることを旨とした壁画においてはそのコンテクスト性こそがひとつの本質であり、そのために19世紀の美術史から忘れられようとしていたとも言えるのだが、今後本調査で得たイメージ資料を用いて研究を進めていくことで、さまざまなイメージの連関からより充実した絵画史を提示できると考えている。

### 注

- 1) フランスでは古い文献資料の電子化が進んでおり、国立図書館の Gallica や国立美術史研究所 (Institut national d'histoire de l'art) の電子図書館では pdf 形式などのファイルを開覧およびダウンロードすることができる。
- 2) J=L・ショーはピュヴィの技法の拙さに注目し、彼の作品の解釈をすすめている。彼女の著作は近年最も充実した論考のひとつである。Shaw, Jennifer L., *Dream States: Puvis de Chavannes, Modernism, and the Fantasy of France*, New Haven, Yale University Press, 2002.
- 3) Emile Cardon, "Le Salon de 1881," *Le Soleil*, 10 mai 1881.
- 4) 19世紀末のパラダイムの転換については、ピエール・フランカステル『絵画と社会』大島清次訳、岩崎美術社、1968年；同著者『近代芸術と技術』平凡社、1971年；レトリックとしての絵画の終焉については Daniel Arasse, *L'Histoire de peintures*, Paris, Gallimard, 2004. にそれぞれ概説がある。
- 5) 六人部昭典「モネ《積みわら》連作の再考 モティーフ・[瞬間性]・個展」『フランス近代美術史の現在 ニュー・アート・ヒストリー以後の視座から』三元社、2007年、pp. 163-192。

### 主要参考文献

- Léon Rosenthal, *Du Romantisme au Réalisme. Essai sur l'évolution de la peinture en France de 1830 à 1848*, Paris, Librairie Renouard; Henri Laurens, 1914; Paris, Macula, 1987.
- Henri Focillon, *La peinture au XIXème siècle*, Paris, Henri Laurens, 1927; Paris, Flammarion, 1991.
- Pierre Vaisse, "Styles et sujets dans la peinture officielle de la IIIème république : Ferdinand Humbert au Pantheon," *Bulletin de la société de l'histoire de l'art français*, 1977, p. 297-311.
- Pierre Vaisse, "La Peinture monumentale au Panthéon sous la IIIe République," *Le Panthéon, symbole des révolutions*, exh. cat., Paris, Hôtel Sully; Montréal, Centre Canadian d'architecture, 1989, pp. 252-8.
- Marie-Claude Chaudonneret, "Historicism and Heritage in the Louvre, 1820-40: from the Musée Charles X to the Galerie d'Apollon", *Art History*, Vol. 14, Dec. 1991, pp. 488-520.
- Francis Haskell, *History and its Images: Art and the Interpretation of the Past*, New Haven, Yale University Press, 1993.
- Pierre Vaisse, *La troisième République et les peintres : Recherches sur les rapports des pouvoirs publics et de la peinture en France de 1870 à 1914*, Thèse de l'Université de Paris, IV, 1980. p. 438, p. 9.

publié sous la même titre, Paris, Flammarion, 1995.  
Collectif, *Puis de Chavannes: au musée des Beaux-Art de Lyon,*

Paris, Musée des Beaux-Arts de Lyon / Réunion des musées  
nationaux, c.1998.